

四半期報告書

(第56期第2四半期)

自 令和4年1月1日

至 令和4年3月31日

株式会社TKC

栃木県宇都宮市鶴田町1758番地

目 次

頁

表 紙

第一部 企業情報

第1 企業の概況

- 1 主要な経営指標等の推移 1
- 2 事業の内容 2

第2 事業の状況

- 1 事業等のリスク 2
- 2 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 2
- 3 経営上の重要な契約等 9

第3 提出会社の状況

1 株式等の状況

- (1) 株式の総数等 10
- (2) 新株予約権等の状況 10
- (3) 行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等 10
- (4) 発行済株式総数、資本金等の推移 10
- (5) 大株主の状況 11
- (6) 議決権の状況 12

2 役員の状況 12

第4 経理の状況 13

1 四半期連結財務諸表

- (1) 四半期連結貸借対照表 14
- (2) 四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書 16
 - 四半期連結損益計算書 16
 - 四半期連結包括利益計算書 17
- (3) 四半期連結キャッシュ・フロー計算書 18

2 その他 24

第二部 提出会社の保証会社等の情報 25

[四半期レビュー報告書] [確認書]

【表紙】

【提出書類】	四半期報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の7第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	令和4年5月11日
【四半期会計期間】	第56期第2四半期（自 令和4年1月1日 至 令和4年3月31日）
【会社名】	株式会社TKC
【英訳名】	TKC Corporation
【代表者の役職氏名】	代表取締役 社長執行役員 飯塚 真規
【本店の所在の場所】	栃木県宇都宮市鶴田町1758番地
【電話番号】	(028)648-2111
【事務連絡者氏名】	取締役 常務執行役員 経営管理本部長 中西 清嗣
【最寄りの連絡場所】	東京都新宿区揚場町2番1号
【電話番号】	(03)3235-5511
【事務連絡者氏名】	取締役 常務執行役員 経営管理本部長 中西 清嗣
【縦覧に供する場所】	株式会社TKC東京本社 (東京都新宿区揚場町2番1号) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

回次		第55期 第2四半期 連結累計期間	第56期 第2四半期 連結累計期間	第55期
会計期間		自令和2年 10月1日 至令和3年 3月31日	自令和3年 10月1日 至令和4年 3月31日	自令和2年 10月1日 至令和3年 9月30日
売上高	(百万円)	33,372	33,768	66,221
経常利益	(百万円)	8,086	8,431	12,673
親会社株主に帰属する四半期 (当期)純利益	(百万円)	5,495	5,816	8,686
四半期包括利益又は包括利益	(百万円)	6,319	6,038	9,839
純資産	(百万円)	81,611	86,338	83,416
総資産	(百万円)	101,067	105,934	103,406
1株当たり四半期(当期)純利益	(円)	104.42	110.82	164.93
潜在株式調整後1株当たり四半期 (当期)純利益	(円)	—	—	—
自己資本比率	(%)	80.7	81.5	80.7
営業活動によるキャッシュ・フロー	(百万円)	3,154	5,086	10,550
投資活動によるキャッシュ・フロー	(百万円)	△3,074	△3,229	△7,201
財務活動によるキャッシュ・フロー	(百万円)	△1,852	△3,219	△3,691
現金及び現金同等物の四半期末 (期末)残高	(百万円)	21,697	21,765	23,126

回次		第55期 第2四半期 連結会計期間	第56期 第2四半期 連結会計期間
会計期間		自令和3年 1月1日 至令和3年 3月31日	自令和4年 1月1日 至令和4年 3月31日
1株当たり四半期純利益	(円)	68.73	68.44

- (注) 1. 当社は四半期連結財務諸表を作成しておりますので、提出会社の主要な経営指標等の推移については記載しておりません。
2. 当社は、役員報酬BIP信託を導入しており、当該信託が保有する当社株式を自己株式として計上しております。これに伴い、1株当たり四半期(当期)純利益の算定上、期中平均株式数の計算において控除する自己株式に含めております。
3. 潜在株式調整後1株当たり四半期(当期)純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
4. 当社は、令和3年4月1日付で普通株式1株につき2株の割合で株式分割を行っております。前連結会計年度の期首に当該株式分割が行われたと仮定し、1株当たり四半期(当期)純利益を算定しております。

2【事業の内容】

当第2四半期連結累計期間において、当社グループ（当社及び当社の関係会社）が営む事業の内容について、重要な変更はありません。また、主要な関係会社における異動もありません。

第2【事業の状況】

1【事業等のリスク】

当第2四半期連結累計期間において、新たな事業等のリスクの発生、または、前事業年度の有価証券報告書に記載した事業等のリスクについての重要な変更はありません。

2【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

I 経営成績

当第2四半期連結累計期間（以下、当第2四半期）におけるわが国経済は、新型コロナウイルス感染症（以下、コロナウイルス）の感染終息が見通せない中、円安とロシアによるウクライナ侵攻に伴う物価の上昇、サプライチェーンの分断が発生しており、依然として不透明感が漂っています。

こうした状況の中、政府はワクチンの追加接種や経済活動の再開に向けて国民や中小企業を支援するさまざまな施策を講じています。当社グループは、そのような政府の取り組みに迅速に対応したシステムやサービスの提供を通じて地域・社会に貢献すべく事業を展開してまいりました。

会計事務所事業部門では、顧客である税理士および公認会計士（以下、TKC会員）が、中小企業の伴走型の支援者として、関与先企業の資金繰り支援や経営助言に取り組めるよう支援しています。また、クラウド型の会計システムの提供を通じて、中小企業の黒字決算と適正申告を支援しています。

地方公共団体事業部門では、令和3年10月20日付で厚生労働省から事務連絡「新型コロナワクチン追加接種（3回目接種）に係る接種券等の印刷及び発送について」が発出されたことを受け、「ワクチン接種券作成業務」「ワクチン接種予約・受付システム」の提供等を迅速に行い、顧客市区町村における新型コロナウイルスのワクチン接種事業を支援しました。

これらの活動の結果、当第2四半期における株式会社TKCとその連結子会社等6社を含む連結グループの経営成績は、売上高が33,768百万円（前期比1.2%増）、営業利益は8,225百万円（同4.0%増）、経常利益は8,431百万円（同4.3%増）、親会社株主に帰属する四半期純利益は5,816百万円（同5.8%増）となりました。

当第2四半期における事業部門別の売上高の推移は以下のとおりです。

1. 第2四半期業績の推移

(1) 会計事務所事業部門の売上高の推移

会計事務所事業部門における売上高は22,776百万円（前期比1.4%増）、営業利益は6,456百万円（同7.8%増）となりました。売上高の内訳は以下のとおりです。

- ① コンピューター・サービス売上高は、前期比3.7%増となりました。これは中堅企業においてDX（Digital Transformation）への取り組みが加速する中で、販売管理システムや給与計算システムといった業務システムとデータ連携して仕訳を計上できる「中堅企業向けクラウド型統合会計情報システム（FX4クラウド）」の導入が進んでいること、会計事務所向けの「税理士事務所オフィス・マネジメント・システム（OMSクラウド）」と外出先・在宅で業務を遂行できる「OMSモバイル」の採用が増加していることなどによります。
- ② ソフトウェア売上高は、前期比2.5%増となりました。これは、令和4年1月から施行された改正電子帳簿保存法に対応するために、「優良な電子帳簿」の法的要件を満たし、証憑保存機能を標準搭載した「FXクラウドシリーズ」を新規に利用する関与先企業が増加したことによります。
- ③ コンサルティング・サービス売上高は、前期比2.6%増となりました。これは「FX4クラウド」の販売が堅調に推移し、立ち上げ支援サービスが増加したことによります。
- ④ ハードウェア売上高は、前期比4.6%減となりました。これは、各金融機関のインターネットバンキングがWindows11に対応されていないため、パソコンの買い替えを先延ばしする企業が多いこと。本年度の「サービス等生産性向上IT導入支援事業（IT導入補助金）」において、ハードウェアの購入費用も含めて補助を受けられるという情報があり、補助金の申請受付が開始される4月以降にパソコンの購入を先延ばしする動きが発生したことで、パソコンの販売台数が減少したことによります。
- ⑤ サプライ用品売上高は、前期比1.6%減となりました。これは、リモート業務やデジタル化を支援する事務機器の販売は好調だったものの、関与先企業の自計化の進展に伴いペーパーレス化が進んだため、紙の会計用品や印刷関連の消耗品の需要が減少したことによります。
- ⑥ なお、営業利益が前期と比較して増加したのは、利益率の高いコンピューター・サービス売上高やソフトウェア売

上高が増加した一方で、利益率の低いハードウェア売上高やサプライ用品売上高が前年よりも減少したことなどによります。

(2) 地方公共団体事業部門の売上高の推移

地方公共団体事業部門における売上高は9,311百万円（前期比0.5%減）、営業利益は1,740百万円（同14.2%減）となりました。売上高の内訳は以下のとおりです。

- ① コンピューター・サービス売上高は、前期比13.8%増となりました。これは、前期までに受託した新たな顧客のシステム稼働に伴いデータセンター利用料が増加したこと、新型コロナワクチン追加接種（3回目接種）に係る接種券等の印刷業務を受託したこと、衆議院選挙に伴う入場券等作成業務を受託したことなどによります。
- ② ソフトウェア売上高は、前期比4.8%減となりました。これは、前期に計上したワクチン接種事業やデジタル手法改正に伴うシステム改修費などの制度改正による一時的な売上高が前期に比べて減少したことによります。なお、基幹系システムのソフトウェア利用料については、顧客数の拡大に伴って順調に推移しています。
- ③ コンサルティング・サービス売上高は、前期比37.9%減となりました。これは、前期に計上した自治体中間サーバ・プラットフォームの次期システムへの移行料が本期は発生しないことなどによります。
- ④ ハードウェア売上高は前期比10.8%減となりました。これは、前期に集中したサーバー等の機器更改が減少したことなどによります。
- ⑤ なお、営業利益が前期と比較して減少したのは、新規顧客のシステム稼働によりコンピューター・サービス売上高が増加した一方で、制度改正などによる一時的なシステム改修売上高とコンサルティング・サービス売上高が前年より減少したことによります。

(3) 印刷事業部門（子会社：株式会社TLP）の売上高の推移

印刷事業部門における売上高は1,680百万円（前期比8.6%増）、営業利益は28百万円（前期は営業損失117百万円）となりました。売上高の内訳は以下のとおりです。

- ① データ・プリント・サービス（DPS）関連商品の売上高は、前期比18.3%増となりました。これは、衆議院議員選挙の入場券、市区町村におけるワクチン接種券、住民税非課税世帯給付金通知、「令和3年分確定申告のお知らせ」はがきの印刷業務などを受注できたことによります。
- ② ビジネスフォーム関連の売上高は、前期比3.2%減となりました。これは、顧客企業のデジタル化が進展しビジネスフォームの需要が減少したことによります。
- ③ 商業美術印刷（カタログ、書籍等）関連の売上高は、前期比10.8%増となりました。これは、電子帳簿保存法の改正、インボイス対応、令和4年度税制改正を解説する書籍等の印刷業務を数多く受注できたことによります。
- ④ なお、営業利益が前期と比較して増加したのは、前述のDPS関連商品の受注額が増加したことによります。

2. 全社に関わる重要な事項

(1) コロナウイルスの感染防止と新しい働き方への対応

コロナウイルス感染拡大の終息が見通せない中、当社は顧客へのサービス提供を継続するため、引き続き以下の感染防止と新しい働き方への対応に取り組んでいます。

- ① クラウドサービス、帳表印刷サービスやヘルプデスクサービスを継続して提供できるよう、事業継続のための体制強化（重要事業所への社外関係者の立ち入り禁止、データセンターを遠隔拠点からリモート操作するためのインフラ整備）を継続しています。
- ② 在宅勤務制度、時差通勤制度を導入し、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の対象地域については、原則としてテレワーク（在宅勤務）を実施しています。顧客サポートや商談についても原則としてWeb会議システムを活用した取り組みを行っています。

(2) 新市場区分「プライム市場」の選択とESG活動実績の開示

令和3年11月に開催の取締役会において、当社は株式会社東京証券取引所の新市場区分における「プライム市場」を選択することを決議しました。それに伴い当社の「サステナビリティ方針」と「ESG活動実績」をホームページに開示しました。

(3) 「FXクラウドシリーズ」の機能において特許を取得

財務会計システム「FXクラウドシリーズ」に搭載する巡回監査機能において特許を取得しました。（令和4年1月20日取得／特許第7012895号）

(4) TKCカスタマーサポートサービス株式会社（TCSS）がHDI「三つ星」を獲得

当社が100%出資するコールセンターサービス専門子会社のTCSSは、本年2月16日にパッケージソフトウェア業界では他社に先駆けて、HDI-Japanによる格付けベンチマーク「クオリティ格付け」において、最高評価の「三つ星」を獲得しました。

3. 会計事務所事業部門の営業活動と経営成績

会計事務所事業部門は、会社定款に定める事業目的（第2条第1項：会計事務所の職域防衛と運命打開のため受託する計算センターの経営）に基づき、当社の顧客である税理士および公認会計士1万1,500名（令和4年3月末日現在）が組織するTKC全国会との密接な連携の下で事業を展開しています。

(1) 「黒字決算」と「適正申告」の実現に向けた活動

① コロナウイルス感染拡大の影響を受けた中小企業の支援

当社は、TKC会員と関与先企業の支援に全力を傾注する方針を掲げ、積極的に顧客を支援しています。

1) TKC会員への最新情報の提供

政府や中小企業支援団体から発信される中小企業支援策の情報を迅速かつ正確にTKC会員に伝えるため、専用のイントラネット（ProFIT）で最新情報と制度等を解説するオンデマンド研修を提供しています。この活動は令和2年2月25日から開始し、令和4年3月末日時点で265本の情報を掲載するに至りました。

2) 「新型コロナウイルス経営支援情報・資金繰り対策コーナー」の提供

政府、都道府県、人口4万人以上の市および金融機関の中小企業支援策を「融資」「雇用」「補助金等」「税制」の区分で確認できる特設サイトを開発し、TKC会員のホームページから確認できるようにしています。令和4年3月末日時点で6,949件の支援策を掲載し、わが国最大の中小企業支援策のデータベースとなっています。なお、このサイトは開設当初から週2回更新しており、常に最新の情報を掲載しています。

3) 「緊急支援関与先チェック機能」のレベルアップ

国の緊急経済対策や政府系金融機関の特別融資など、中小企業支援策の適用の可否に関与先企業ごとに自動判定し、一覧形式で確認できる「緊急支援関与先チェック機能」を「税理士事務所オフィス・マネジメント・システム（OMSクラウド）」に搭載しています。新たな補助金・緊急融資等の申請要件が明らかになる都度更新し、対象となる関与先企業をワンクリックで抽出できる機能を提供しています。令和4年2月には「事業復活支援金」の適用可能性を判定できるようレベルアップを行いました。

4) 「TKC月次指標（月次BAST）」の提供

「TKC月次指標（月次BAST）」はTKC会員が月次巡回監査を実施した25万社超の「月次決算データ」を収録しており、無償で提供しています。当指標は、国内に類を見ない統計資料であり、直近の売上高や借入金の推移などを全国、都道府県別、年商規模別、業種別に確認することが可能です。今後の中小企業支援策を検討するなどの用途で、金融機関や行政機関等の中小企業支援者、中小企業の動向を分析する経済学者などに活用いただいています。

② TKC全国会が掲げる新たな運動方針とその目標達成に向けた営業活動の実施

1) TKC全国会の新たな運動方針

TKC全国会は、向こう3年間の新たな運動方針として「未来に挑戦するTKC会計人——巡回監査を断行し、企業の黒字決算と適正申告を支援しよう！」を掲げました。またその実現に向けて、次の3つの目標を掲げています。

i) 優良な電子帳簿を圧倒的に拡大する

「TKC方式の自計化」の推進

ii) 租税正義の守護者となる

「TKC方式の書面添付」の推進

iii) 黒字化を支援し、優良企業を育成する

「巡回監査」と「経営助言」の推進

TKC全国会は、社会に対して巡回監査の実践とコンプライアンスを遵守しながら、企業の黒字化に貢献すると宣誓されています。当社は、これらの3つの目標達成を支援するためTKC方式の自計化推進を軸に積極的に営業活動を展開します。

2) 「TKC経営指標（BAST）」の優良企業の定義変更

令和4年版の「TKC経営指標（BAST）」（令和4年6月発行予定）から優良企業として集計する企業の定義を次の条件をすべて満たした企業に変更します。

- ・書面添付の実践
- ・中小会計要領への準拠
- ・限界利益額の2期連続増加
- ・自己資本比率が30%以上
- ・税引前当期純利益がプラス

TKC会員の指導のもとコンプライアンスを遵守しながら、高付加価値経営に取り組む企業に焦点を当てた条件とすることにより、「TKC会員は地域の優良企業を育成する支援者である」ことを社会に訴えかけてまいります。

3) TKC方式の自計化の推進（「FXシリーズ」の推進）

多くの中小企業がコロナ禍において実行された実質無利子・無担保融資の返済に備える必要があることから、「FXシリーズ」に搭載している「経営戦略レベル」の機能（予算登録、部門別管理、資金繰り実績表）の活用を支援しました。また、経営者がこれらの機能を有効に活用するためには、適時・正確な会計取引の入力が必要となるため、「日常業務レベル」の機能として、インターネットバンキングから取引明細を受信して仕訳に変換

する「銀行信販データ受信機能」の活用や、「戦略給与情報システム（P X 2）」との給与仕訳の連携などを支援しています。

また、クラウド型の財務会計システムである「F Xクラウドシリーズ」では、経営者自らが高い頻度でシステムにアクセスし業績を確認する傾向があります。経営者自身のパソコンからアクセスできるクラウドのメリットが生かされています。当社は、「F Xクラウドシリーズ」の導入支援を通じて中小企業の「黒字決算」と「適正申告」を支援します。

こうした活動の結果、令和4年3月末日現在でF Xシリーズの導入件数は約29万5,000件となりました。

4) 電子帳簿保存法への完全対応支援

令和4年1月1日から施行された改正電子帳簿保存法では、電子帳簿の保存要件が緩和されています。これにより、国税関係帳簿の電磁的記録である「電子帳簿」は、①過去の仕訳データの加除訂正履歴（トレーサビリティ）を残している「優良な電子帳簿」（改正電子帳簿保存法の施行規則第2条及び第5条の要件を満たす電子帳簿）と、②帳簿の加除訂正履歴を残さない会計ソフトで作成した「その他の電子帳簿」（改正電子帳簿保存法の施行規則第2条の要件だけを満たす電子帳簿）に区別されることになりました。「その他の電子帳簿」が認められたことは、「帳簿の証拠力」を消滅させる法改正であり、帳簿を改ざんできる会計ソフトの利用を国が認めたこととなります。当社はこの問題に対処するため、「優良な電子帳簿」を作成する「F Xシリーズ」の利用促進を全国的に展開しています。

また、改正電子帳簿保存法により電子取引データの電子保存の義務化への対応も求められています。令和5年12月までは紙での保存も宥恕されていますが、全ての事業者が2年以内にその対応を迫られることとなります。

「F Xシリーズ」は電子取引データを電子保存できる機能を標準搭載しており、その活用を支援しています。

5) インボイス制度への完全対応支援

令和5年10月1日にインボイス制度が開始されます。消費税の課税事業者においては、適用開始までの期間で、適格請求書発行事業者の登録申請、適格請求書の発行への対応、適格請求書からの仕訳計上方法の学習等の準備を進める必要があります。このような対応の支援を会計事務所が中小企業にスムーズに行えるよう、当社ではオンデマンド研修の整備や資料の提供等を進めています。

6) 「TKCモニタリング情報サービス」の推進

「TKCモニタリング情報サービス」は、TKC会員事務所が毎月の巡回監査と月次決算を実施した上で作成した月次試算表、年度決算書、税務申告書などを、関与先企業の経営者からの依頼に基づいて金融機関に開示するための無償のクラウドサービスです。開示のタイミングは、月次試算表の場合は月次決算終了直後、年度決算書および税務申告書の場合は税務署に対して電子申告した直後となります。

また、当社は「TKCモニタリング情報サービス」の推進と同時に、金融機関に対して中小企業の決算書の信頼性は以下の3帳表で確認できることを訴求しました。

i) TKC会員が実践する「税理士法第33条の2に基づく添付書面」

ii) 会社法第432条が定める帳簿の適時性および決算書と申告書の連動性を株式会社TKCが過去3年にわたって証明する「記帳適時性証明書」

iii) 日本税理士会連合会、全国信用保証協会連合会が制定した「中小会計要領チェックリスト」

こうした活動の結果、「TKCモニタリング情報サービス」は令和4年3月末日現在で、全国全ての地方銀行（64行）を含む474金融機関に採用されています。また、令和4年3月末日には同サービス利用件数は30万件を突破しました。

コロナ禍において中小企業の過剰債務問題が顕在化し始めている中、「TKCモニタリング情報サービス」は、月次試算表、年度決算書、税務申告書を迅速に提供される点において、中小企業の経営支援に取り組んでいる金融機関と信用保証協会から高く評価されています。

当サービスは、中小企業の経営支援において、金融機関とTKC会員の架け橋となることが期待されています。

7) 会員導入（TKC全国会への入会促進）

TKC全国会では、引き続きTKC会員事務所数を1万超とする運動に取り組んでいます。当社はその達成に向けて、TKC全国会ニューメンバーズ・サービス委員会などと密接に連携し、Webセミナーを積極的に開催するなどの活動を展開しました。

この結果として令和4年3月末日現在のTKC会員事務所数は9,900事務所、会員数は1万1,500名となっています。なお事務所数と会員数に違いがあるのは、1事務所に複数会員が所属する場合があるためです。

(2) 「適時・正確な記帳に基づく信頼性の高い決算書の作成を支援する」ための活動

① 「中小会計要領」の普及のための支援活動

TKC全国会では、中小企業が準拠すべき会計基準として、平成24年2月に制定された「中小企業の会計に関する基本要領」（以下、中小会計要領）を推奨しています。

中小会計要領は、①自社の経営状況の把握に役立つ会計②利害関係者（金融機関等）への情報提供に資する会計③会計と税制の調和を図った上で、会社計算規則に準拠した会計④中小企業に過重な負担を課さない会計——の考

えに沿って制定されています。

当社は、その普及・活用に向けたTKC全国会の運動を支援するため、教材などの整備と他の中小企業支援団体との連携に継続して取り組んでいます。

②「記帳適時性証明書」の発行

当社では、TKC会員が当社の会計システムを利用する際に当社データセンターに自動的に保存される処理履歴データと過去の時系列データを活用し、金融機関などが客観的にTKC会員事務所の業務水準を判定する資料となる「記帳適時性証明書」を無償で発行しています。

このサービスは、TKC会員が作成する決算書と税務申告書の信頼性を高め、関与先企業の円滑な資金調達に貢献することを目的として開発されたものです。これは過去データの遡及的な加除・訂正を禁止している当社の「データセンター利用方式による財務会計処理」の特長を生かしたものでありTKC会員が毎月、関与先企業に出向いて正しい会計記帳を指導（月次巡回監査）しながら、月次決算、確定決算ならびに電子申告に至るまでの全ての業務プロセスを一気通貫で適時に完了したことを当社が第三者として証明するものです。

令和4年1月からTKCシステムで会計処理と税務申告処理を行い、記帳適時性証明書が発行された個人事業者を対象として、青色申告決算書等を「TKCモニタリング情報サービス」を利用して金融機関に提出できるように機能強化しました。今後もさらなる金融機関との連携強化を支援します。

(3)大企業市場への展開

当社は、TKCシステムの活用により上場企業を中心とする大企業の税務・会計業務のコンプライアンス向上と合理化に貢献するとともに、これらの企業およびその関係会社をTKC会員の関与先企業とするための活動を積極的に展開しています。

①グループ通算制度への対応

令和4年4月1日以後に開始する事業年度から連結納税制度が見直され、新たにグループ通算制度が適用されることになりました。グループ通算制度を適用する法人は、親法人および各子法人が法人税申告を電子申告にて行うこととなります。

当社は、これまで資本金1億円超の大企業の電子申告義務化への対応を積極的に支援してまいりました。それにより、令和4年3月末日現在で約2万2,000社あるといわれる資本金1億円超の企業の約36%において「法人電子申告システム（ASP1000R）」「連結納税システム（eConsoliTax）」をご利用いただいています。

当社ではこれまで培ったノウハウを生かし、グループ通算制度に対応する「グループ通算申告システム」を開発するとともに、グループ通算制度を選択適用される企業グループが円滑に対応できるように、TKC全国会中堅・大企業支援研究会（令和4年3月末日現在の会員数は1,524名）と連携し支援しています。

②改正電子帳簿保存法、消費税インボイス制度への対応

令和4年1月から施行された改正電子帳簿保存法では、電子帳簿の保存要件が緩和されるとともに電子取引データの電子保存が義務化（有償措置あり）されました。さらに、令和5年10月から消費税インボイス制度が開始されるため、現在、電子インボイスの標準仕様の策定とその普及に向けた取り組みが進められています。これらの法改正への対応を支援するため「インボイス・マネジャー」を令和4年1月から提供開始し、中堅・大企業の350社に導入いただいています。

③海外子会社の業績管理支援

現在、コロナウイルスの感染拡大で海外渡航が制限されているため、海外に展開している企業は、海外子会社の業績管理とガバナンスの確保に課題を抱えています。当社が提供する「海外ビジネスモニター（OBMonitor）」は、海外子会社の財務データを日本にしながら確認できるクラウドサービスであり、このような課題を抱えている企業での採用が増加しています。OBMonitorのユーザー社数は1,200社となり、世界37カ国で活用されています。また、金融機関とビジネスマッチング契約を締結し、取引先企業の海外展開を強力に支援し、業績管理や会計処理のミス・不正の発見・牽制を支援しています。既に全国9金融機関とビジネスマッチング契約を締結しており、今後も提携する金融機関を拡大していきます。

こうした活動の結果、「TKC連結グループソリューション」の利用企業グループ数は、令和4年3月末日現在で約5,000企業グループとなりました。それにより日本の上場企業の売上高トップ100社のうち91%の企業が当社のシステムを採用しています。また、日本の上場企業における市場シェアは41%となりました。

(4)法律情報データベースの市場拡大

①「TKCローライブラリー」の利用拡大

リーガルリサーチを効果的に行えるよう、関連するコンテンツをセットにしたTKCローライブラリーの「法律事務所向け」や「企業法務部門向け」のバックサービスの展開を進めております。コロナウイルスの影響からオンラインで業務を遂行することが当たり前となった現在では、資料室や図書館などを利用した調査に代わり、当該バックサービスを採用いただくケースが主流となっています。これにより、法令・判例・文献情報に加え、主要法律専門誌の記事をいつでもどこでも利用できるTKCローライブラリーの評価が高まっています。その結果、利用者数やコンテンツ追加の契約が増加しました。

また、令和3年6月にTKCローライブラリーの新たなオプションサービスとして、法律、会計、税務、経営等の専門書籍をPDFで閲覧できるサービス「Legal Book Search」の提供を開始しました。このサービスは、弁護

士が書籍情報を無償で検索し、PDF化された書籍をタブレットやパソコンで閲覧（有償）できる定額制のサービスで、閲覧可能な書籍も継続して追録しており、順調に拡大しています。

当第2四半期においては、TKC会員事務所をはじめ大学・法科大学院、官公庁、法律事務所、特許事務所、企業法務部などへのオンライン提案活動の結果、ユーザー数は5万7,000IDを超え、令和4年3月末日現在で2万5,000超の諸機関で利用されています。

②アカデミック市場における展開

令和3年10月以降もコロナウイルスの影響で多くの大学・法科大学院は、対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド型もしくは完全オンライン型の授業を実施しています。当社が提供する「TKC教育研究支援システム」「TKCローライブラリー」などのシステムは、いつでもどこでもオンラインで利用でき、他社をしのぐ多様かつ多数のコンテンツの収録、レポートや演習、テスト機能が搭載されています。これらの特長が教員、学生のオンライン授業および学習を支えるものとして再評価されています。現在も、各大学と随時Web会議を実施し、大学の実情に応じたオンラインによる学習環境整備の支援を継続しています。

また、大学の法学部を中心に提供しているオンライン学習ツール（公務員試験、ビジネス実務法務検定、法学検定試験）は、令和4年3月末日現在で26校が利用しています。現在、多くの資格試験がCBT/IBT方式によるコンピューター利用試験を採用しています。そのため、オンラインテスト機能などコンピューター試験対策としても有効な当社のオンライン学習ツールの活用を、資格試験の実施団体や受験生に訴求してまいります。

4. 地方公共団体事業部門の営業活動と経営成績

地方公共団体事業部門は、会社定款に定める事業目的（第2条第2項：「地方公共団体の行政効率向上のため受託する計算センターの経営」）に基づき、行政効率の向上による住民福祉の増進を支援することを目的として、専門特化した情報サービスを展開しています。

(1) 基幹系サービスの開発・提供

当社は、地方公共団体（主に市区町村）に対して、「TKC行政クラウドサービス」を提供しています。これは基幹系業務と内部情報系業務を支援する「TASKクラウドサービス」と、納税通知書などの大量一括出力処理を支援する「TASKアウトソーシングサービス」で構成するクラウドサービスです。

「TASKクラウドサービス」は、当社データセンターを運用拠点とした単一バージョンのパッケージシステムでありながら、複数団体による共同利用を前提に設計しています。また、サービス利用料金は、団体規模に応じた定額のサブスクリプション方式を採用しており、この利用料金の範囲内で、年1回の定期バージョンアップを実施しています。こうした点が評価され「TASKクラウドサービス」は、令和4年3月末日現在で約170団体に採用されています。

当期においては、これらの団体に対し新型コロナワクチン追加接種（3回目接種）に係るシステムを迅速に提供し、顧客市区町村のワクチン接種事業を積極的に支援しました。

(2) 行政サービス・デジタル化への対応

当社では、自治体DX推進に貢献すべく〈来させない・待たせない・書かせない〉窓口サービスの実現を支援する「行政サービス・デジタル化支援ソリューション」を提供しています。

当期においては、「TASKクラウドかんたん窓口システム」や「TASKクラウドマイナンバーカード交付予約・管理システム」、「TASKクラウドスマート申請システム」について、大幅な機能強化を行いました。これらのサービスの有効活用を提案した結果、令和4年3月末日現在において「TASKクラウドスマート申請システム」は大阪市、横浜市、堺市など政令指定都市を含む約30団体に、「TASKクラウドかんたん窓口システム」は約30団体に、「TASKクラウドマイナンバーカード交付予約・管理システム」は約110団体に採用されています。

(3) 地方税務手続きのデジタル化への対応

地方税共同機構の認定委託先事業者として、同機構が運営するeLTAX（地方税ポータルシステム）の審査システムなどの標準システムをクラウド方式で提供するとともに、当社独自の機能として各市区町村の税務システムとの「データ連携サービス」を開発・提供しています。

本サービスの推進にあたっては、アライアンス契約を結ぶ50社のパートナー企業と共に提案活動を展開しています。その結果、「TASKクラウド地方税電子申告支援サービス」は、令和4年3月末日現在で全都道府県・市区町村の4割以上に当たる約780団体に採用されています。

当期においては、当社独自のサービスであるデータ連携サービスの機能強化に取り組むほか、パートナー企業と共に積極的な提案活動および導入支援に取り組みました。

(4) 地方公会計の統一的な基準への対応

当社では、国が推奨する日々仕訳方式に対応した財務会計システムと一体的な地方公会計システムである「TASKクラウド公会計システム」と、その関連システムとして「TASKクラウド固定資産管理システム」、「TASKクラウド連結財務書類作成システム」を提供しています。

令和2年3月に総務省が公表した『地方公会計の推進に関する研究会（令和元年度）報告書』には、次のような記載があります。（財務会計システムと一体的な地方公会計システムを導入し、あらかじめ予算科目と勘定科目の紐付けを行うことや、予算執行時に自動的に仕訳変換をする仕組みを構築することにより、日々仕訳の円滑な導入や期末一括仕訳における確認作業の軽減も可能になると考えられる。また、公有財産台帳と固定資産台帳のデータを連携・統

合することにより、各台帳への登録業務を効率化することが可能になると考えられる)

こうした国の方針を踏まえ、当社ではシステム更新などのタイミングで国が推奨する日々仕訳方式に対応した公会計システムとして「TASKクラウド公会計システム」の導入を提案しています。

当期においては、〈正確な財政状況の見える化〉や〈会計情報の活用〉など持続可能な行政経営の実現を支援する機能を拡充した次世代版の公会計システムの提供を開始しました。

その結果、地方公会計システムは令和4年3月末日現在で約300団体に採用されています。

(5)次世代製品の研究・開発

コロナウイルスの感染拡大を機に行政分野でのデジタル化・オンライン化の遅れが顕著となりました。こうした状況を踏まえ、政府は『経済財政運営と改革の基本方針2020』（令和2年7月閣議決定）において、デジタル・ガバメントの構築を“一丁目一番地”の最優先課題と位置付け、行政手続きのオンライン化やワンストップ・ワンスオンリー化などデジタル化の取り組みを加速しています。また、令和2年12月25日に総務省から『自治体デジタル・トランスフォーメーション（DX）推進計画』が公表され、令和3年5月12日にはデジタル改革関連の6法が成立しました。これにより、全国の市区町村は令和8年3月末までに「情報システムの標準化・共通化」に対応することが求められています。

当社では、こうした顧客を取り巻く環境変化に対応するため、令和3年11月1日付で自治体DX推進本部を新設し、新製品・サービスの企画、開発を一段と加速するとともに、最新情報の収集・発信など顧客サポートの強化に努めています。

また当期においては、デジタル庁の「ガバメントクラウド先行业務」に当社顧客（埼玉県美里町、川島町）の共同提案が採択され、当社はアプリケーション開発事業者として両町とともに当事業への取り組みを開始しました。また、〈行政サービス・デジタル化〉を支援するため先進団体との実証事業などを通じて次世代ソリューションの調査・研究、開発にも継続して取り組みました。

5. 印刷事業部門の営業活動と経営成績

当社グループの印刷事業部門は、データ・プリント・サービス（以下、DPS）事業、ビジネスフォーム印刷事業および商業美術印刷事業を基軸に事業を展開しています。

当第2四半期においては、特に、市区町村から衆議院議員選挙入場券、ワクチン接種事業におけるワクチン接種券、住民税非課税世帯給付金通知、国税庁から「令和3年分確定申告のお知らせ」はがきの印刷業務を受注したことにより、売上高は前年に比べて増加しました。

DPS分野では、市区町村における住民への通知業務や、民間企業におけるダイレクトメール発送業務等を支援するため、独自の圧着技術によって封入・封緘作業を不要とする製品や、可変印刷・印字の技術を用いた印刷製品を提供しています。

ビジネスフォーム印刷分野では、ペーパーレス化の進展の影響により、ビジネス帳票の需要が減少し、売上高は前年に比べて減少しました。

商業美術印刷分野（カタログ、書籍等）では、改正電子帳簿保存法の制度改正、インボイス制度への対応、令和4年度税制改正を解説する書籍等の印刷業務を受注したことにより、売上高は前年に比べて増加しました。

II 財政状態

当第2四半期連結会計期間末における資産・負債及び純資産の状況は次の通りです。

1. 資産の部について

当第2四半期連結会計期間末における資産合計は、105,934百万円となり、前連結会計年度末103,406百万円と比較して2,527百万円増加しました。

(1) 流動資産

当第2四半期連結会計期間末における流動資産は、37,010百万円となり、前連結会計年度末36,107百万円と比較して902百万円増加しました。

その主な理由は、現金及び預金が1,361百万円減少したものの、受取手形、売掛金及び契約資産に含まれる売掛金が2,593百万円増加したことによります。

(2) 固定資産

当第2四半期連結会計期間末における固定資産は、68,923百万円となり、前連結会計年度末67,298百万円と比較して、1,625百万円増加しました。

その主な理由は、その他に含まれる長期繰延税金資産が330百万円、建物及び構築物（純額）が234百万円減少したものの、投資有価証券が1,190百万円、長期預金が1,100百万円増加したことによります。

2. 負債の部について

当第2四半期連結会計期間末における負債合計は、19,595百万円となり、前連結会計年度末19,990百万円と比較して394百万円減少しました。

(1) 流動負債

当第2四半期連結会計期間末における流動負債は、14,308百万円となり、前連結会計年度末14,721百万円と比較して、413百万円減少しました。

その主な理由は、未払法人税等が368百万円増加したものの、賞与引当金が933百万円減少したことによります。

(2) 固定負債

当第2四半期連結会計期間末における固定負債は、5,287百万円となり、前連結会計年度末5,268百万円と比較して、18百万円増加しました。

その主な理由は、長期借入金金が35百万円減少したものの、退職給付に係る負債が59百万円増加したことによります。

3. 純資産の部について

当第2四半期連結会計期間末における純資産合計は、86,338百万円となり、前連結会計年度末83,416百万円と比較して2,922百万円増加しました。

その主な理由は、自己株式が1,025百万円増加したことにより純資産が減少したものの、利益剰余金が3,725百万円増加したことによります。

なお、当第2四半期連結会計期間末における自己資本比率は、81.5%となり、前連結会計年度末80.7%と比較して0.8ポイント増加しました。

Ⅲ キャッシュ・フローの状況

当第2四半期連結会計期間末における「現金及び現金同等物」の残高は、前連結会計年度末に比べ1,361百万円減少し、21,765百万円になりました。

当第2四半期連結累計期間における各キャッシュ・フローの概況とその主な理由は次のとおりです。

(1) 営業活動によるキャッシュ・フロー

営業活動によるキャッシュ・フローについては、5,086百万円増加（前年同四半期比1,932百万円収入増）しました。これは、税金等調整前四半期純利益8,431百万円の計上、売上債権2,416百万円の増加、および法人税等の支払2,018百万円などによるものです。

(2) 投資活動によるキャッシュ・フロー

投資活動によるキャッシュ・フローについては、3,229百万円減少（前年同四半期比155百万円支出増）しました。これは、定期預金の預入2,800百万円の支出、定期預金の払戻1,700百万円の収入、投資有価証券の取得1,014百万円の支出、および無形固定資産の取得1,045百万円の支出などによるものです。

(3) 財務活動によるキャッシュ・フロー

財務活動によるキャッシュ・フローについては、3,219百万円減少（前年同四半期比1,366百万円支出増）しました。これは、令和3年9月期期末配当2,088百万円（1株当たり配当39.5円）の支払い、自己株式の取得1,034百万円などによるものです。

Ⅳ 事業上及び財務上の対処すべき課題

当第2四半期連結累計期間において、当社グループが対処すべき課題について重要な変更はありません。

Ⅴ 研究開発活動

当第2四半期連結累計期間における当社グループの研究開発費はありません。

なお、当第2四半期連結累計期間において、当社グループの研究開発活動の状況に重要な変更はありません。

3 【経営上の重要な契約等】

当第2四半期連結会計期間において、経営上の重要な契約等の決定又は締結等はありません。

第3【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	120,000,000
計	120,000,000

②【発行済株式】

種類	第2四半期会計期間末現在発行数(株) (令和4年3月31日)	提出日現在発行数(株) (令和4年5月11日)	上場金融商品取引所名又は登録認可金融商品取引業協会名	内容
普通株式	53,462,066	53,462,066	東京証券取引所 市場第一部(第2四半期会計期間末現在) プライム市場(提出日現在)	単元株式数 100株
計	53,462,066	53,462,066	—	—

(2)【新株予約権等の状況】

①【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

②【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総数増減数(株)	発行済株式総数残高(株)	資本金増減額(百万円)	資本金残高(百万円)	資本準備金増減額(百万円)	資本準備金残高(百万円)
令和4年1月1日～ 令和4年3月31日	—	53,462,066	—	5,700	—	5,409

(5) 【大株主の状況】

令和4年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (百株)	発行済株式(自己 株式を除く。)の 総数に対する所有 株式数の割合 (%)
公益財団法人飯塚毅育英会	栃木県宇都宮市鶴田町1758番地	75,170	14.3
大同生命保険株式会社	大阪府大阪市西区江戸堀1丁目2番1号	51,380	9.8
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	48,752	9.3
公益財団法人租税資料館	東京都中野区南台3丁目45番13号	30,930	5.9
T K C社員持株会	東京都新宿区揚場町2番1号	29,125	5.5
SSBTC CLIENT OMNIBUS ACCOUNT (常任代理人 香港上海銀行東京支店)	ONE LINCOLN STREET, BOSTON MA USA 02111 (東京都中央区日本橋3丁目11番1号)	28,006	5.3
飯塚 真玄	栃木県宇都宮市	14,626	2.8
株式会社日本カストディ銀行(信託口)	東京都中央区晴海1丁目8番12号	13,738	2.6
東京海上日動火災保険株式会社	東京都千代田区丸の内1丁目2番1号	13,328	2.5
あいおいニッセイ同和損害保険株式会社	東京都渋谷区恵比寿1丁目28番1号	11,966	2.3
損害保険ジャパン株式会社	東京都新宿区西新宿1丁目26番1号	11,966	2.3
計	—	328,991	62.5

(注) 発行済株式の総数に対する所有株式数の割合の計算にあたり控除する自己株式には、役員報酬B I P信託が所有する当社株式215,200株は含めておりません。

(6) 【議決権の状況】

①【発行済株式】

令和4年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 829,300	—	—
完全議決権株式(その他)	普通株式 52,555,300	525,553	—
単元未満株式	普通株式 77,466	—	—
発行済株式総数	53,462,066	—	—
総株主の議決権	—	525,553	—

(注) 「完全議決権株式(その他)」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が1,300株(議決権の数13個)及び役員報酬B I P信託が所有する株式215,200株(議決権の数2,152個)を含めております。

②【自己株式等】

令和4年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数(株)	他人名義所有株式数(株)	所有株式数の合計(株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
株式会社TKC	栃木県宇都宮市鶴田町1758番地	829,300	—	829,300	1.55
計	—	829,300	—	829,300	1.55

(注) 上記のほか、役員報酬B I P信託が所有する当社株式215,200株を、自己株式として計上しております。

2【役員】の状況】

前事業年度の有価証券報告書提出日後、当四半期累計期間における役員の異動はありません。

第4【経理の状況】

1. 四半期連結財務諸表の作成方法について

当社の四半期連結財務諸表は、「四半期連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（平成19年内閣府令第64号）に基づいて作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、第2四半期連結会計期間（令和4年1月1日から令和4年3月31日まで）及び第2四半期連結累計期間（令和3年10月1日から令和4年3月31日まで）に係る四半期連結財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人による四半期レビューを受けております。

1 【四半期連結財務諸表】

(1) 【四半期連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (令和3年9月30日)	当第2四半期連結会計期間 (令和4年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	26,426	25,065
受取手形及び売掛金	6,973	—
受取手形、売掛金及び契約資産	—	9,791
棚卸資産	※ 412	※ 562
その他	2,309	1,602
貸倒引当金	△14	△10
流動資産合計	36,107	37,010
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物（純額）	7,855	7,621
土地	6,802	6,802
その他（純額）	2,882	2,782
有形固定資産合計	17,540	17,206
無形固定資産	3,605	3,901
投資その他の資産		
投資有価証券	19,705	20,895
長期預金	16,600	17,700
差入保証金	1,440	1,436
その他	8,406	7,783
投資その他の資産合計	46,152	47,815
固定資産合計	67,298	68,923
資産合計	103,406	105,934
負債の部		
流動負債		
買掛金	2,402	2,768
電子記録債務	834	840
短期借入金	80	71
未払金	3,034	2,450
未払法人税等	2,211	2,579
契約負債	—	288
賞与引当金	4,073	3,140
その他	2,083	2,168
流動負債合計	14,721	14,308
固定負債		
長期借入金	214	178
退職給付に係る負債	3,554	3,613
株式給付引当金	307	314
その他	1,192	1,180
固定負債合計	5,268	5,287
負債合計	19,990	19,595

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (令和3年9月30日)	当第2四半期連結会計期間 (令和4年3月31日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	5,700	5,700
資本剰余金	6,589	6,589
利益剰余金	73,411	77,136
自己株式	△1,352	△2,377
株主資本合計	84,348	87,048
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	449	584
退職給付に係る調整累計額	△1,382	△1,294
その他の包括利益累計額合計	△932	△710
純資産合計	83,416	86,338
負債純資産合計	103,406	105,934

(2) 【四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書】

【四半期連結損益計算書】

【第2四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第2四半期連結累計期間 (自 令和2年10月1日 至 令和3年3月31日)	当第2四半期連結累計期間 (自 令和3年10月1日 至 令和4年3月31日)
売上高	33,372	33,768
売上原価	9,640	9,689
売上総利益	23,731	24,079
販売費及び一般管理費	※ 15,825	※ 15,854
営業利益	7,906	8,225
営業外収益		
受取利息	23	34
受取配当金	70	83
保険配当金	12	18
受取地代家賃	25	26
その他	48	65
営業外収益合計	180	228
営業外費用		
支払利息	0	0
為替差損	0	—
課徴金	—	20
その他	—	1
営業外費用合計	0	21
経常利益	8,086	8,431
特別利益		
固定資産売却益	1	1
特別利益合計	1	1
特別損失		
固定資産売却損	22	—
固定資産除却損	14	1
特別損失合計	36	1
税金等調整前四半期純利益	8,050	8,431
法人税、住民税及び事業税	2,277	2,382
法人税等調整額	277	232
法人税等合計	2,555	2,615
四半期純利益	5,495	5,816
親会社株主に帰属する四半期純利益	5,495	5,816

【四半期連結包括利益計算書】

【第2四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第2四半期連結累計期間 (自 令和2年10月1日 至 令和3年3月31日)	当第2四半期連結累計期間 (自 令和3年10月1日 至 令和4年3月31日)
四半期純利益	5,495	5,816
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	738	134
退職給付に係る調整額	85	87
その他の包括利益合計	824	222
四半期包括利益	6,319	6,038
(内訳)		
親会社株主に係る四半期包括利益	6,319	6,038

(3) 【四半期連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前第2四半期連結累計期間 (自 令和2年10月1日 至 令和3年3月31日)	当第2四半期連結累計期間 (自 令和3年10月1日 至 令和4年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前四半期純利益	8,050	8,431
減価償却費	1,464	1,494
固定資産売却損益(△は益)	20	△1
固定資産除却損	14	1
株式給付引当金の増減額(△は減少)	△293	7
賞与引当金の増減額(△は減少)	△531	△933
退職給付に係る負債の増減額(△は減少)	127	184
売上債権の増減額(△は増加)	△3,128	△2,416
その他の資産の増減額(△は増加)	72	△21
仕入債務の増減額(△は減少)	990	144
その他の負債の増減額(△は減少)	△1,525	184
その他	224	△104
小計	5,487	6,970
利息及び配当金の受取額	110	135
利息の支払額	△0	△0
法人税等の支払額	△2,442	△2,018
営業活動によるキャッシュ・フロー	3,154	5,086
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	△1,700	△2,800
定期預金の払戻による収入	1,700	1,700
有形固定資産の取得による支出	△473	△97
無形固定資産の取得による支出	△604	△1,045
投資有価証券の取得による支出	△2,030	△1,014
その他	34	28
投資活動によるキャッシュ・フロー	△3,074	△3,229
財務活動によるキャッシュ・フロー		
長期借入金の返済による支出	△71	△45
自己株式の売却による収入	—	0
自己株式の取得による支出	△5	△1,034
配当金の支払額	△1,726	△2,088
その他	△48	△51
財務活動によるキャッシュ・フロー	△1,852	△3,219
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	△1,771	△1,361
現金及び現金同等物の期首残高	23,469	23,126
現金及び現金同等物の四半期末残高	※ 21,697	※ 21,765

【注記事項】

(会計方針の変更)

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 令和元年7月4日。以下「時価算定会計基準」)等を第1四半期連結会計期間の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 令和元年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することといたしました。なお、四半期連結財務諸表に与える影響はありません。

(追加情報)

(収益認識会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 令和2年3月31日。以下「収益認識会計基準」)等を第1四半期連結会計期間の期首から適用しております。

収益認識会計基準等を適用したため、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」に表示していた「受取手形及び売掛金」は、第1四半期連結会計期間より「受取手形、売掛金及び契約資産」に含めて表示し、「流動負債」の「その他」に含めていた「契約負債」は、独立掲記しております。なお、収益認識会計基準第89-4項に定める経過的な取扱いに従って、前連結会計年度について新たな表示方法により組替えを行っておりません。

さらに、「四半期財務諸表に関する会計基準」(企業会計基準第12号 令和2年3月31日)第28-15項に定める経過的な取扱いに従って、前第2四半期連結累計期間に係る顧客との契約から生じる収益を分解した情報を記載しておりません。

(役員向け株式報酬制度)

1 取引の概要

当社は、平成30年10月31日開催の取締役会で株式報酬制度の導入を決議し、平成30年12月21日開催の定時株主総会の承認に基づき、取締役等の報酬と当社の株式価値との連動性をより明確にし、取締役等が株価上昇によるメリットのみならず株価下落によるリスクまでも株主の皆様と共有することにより、中長期的な企業価値増大への貢献意識を高めることを目的として、株式報酬制度である「役員報酬BIP信託」を導入いたしました。

なお、本制度は、委員長及び委員の半数を独立社外役員及び社外有識者で構成する「指名・報酬諮問委員会」における審議を経て、令和元年12月20日開催の定時株主総会にて取締役等(執行役員を兼務しない取締役を除く。)及び常勤監査役の株式報酬を「業績連動報酬」へ変更することが承認されております。

2 信託に残存する自社の株式

信託に残存する当社株式を、信託における帳簿価額(付随費用の金額を除く。)により、純資産の部に自己株式として計上しております。当該自己株式の帳簿価額及び株式数は、当第2四半期連結会計期間末425百万円、215,200株であります。

(連結納税制度からグループ通算制度への移行に係る税効果会計の適用)

当社及び連結子会社は、「所得税法等の一部を改正する法律」(令和2年法律第8号)において創設されたグループ通算制度への移行及びグループ通算制度への移行にあわせて単体納税制度の見直しが行われた項目については、「連結納税制度からグループ通算制度への移行に係る税効果会計の適用に関する取扱い」(実務対応報告第39号 令和2年3月31日)第3項の取扱いにより、「税効果会計に係る会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第28号 平成30年2月16日)第44項の定めを適用せず、繰延税金資産及び繰延税金負債の額について、改正前の税法の規定に基づいております。

(四半期連結貸借対照表関係)

※ 棚卸資産の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (令和3年9月30日)	当第2四半期連結会計期間 (令和4年3月31日)
商品及び製品	222百万円	278百万円
仕掛品	51百万円	133百万円
原材料及び貯蔵品	138百万円	149百万円

(四半期連結損益計算書関係)

※ 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前第2四半期連結累計期間 (自 令和2年10月1日 至 令和3年3月31日)	当第2四半期連結累計期間 (自 令和3年10月1日 至 令和4年3月31日)
給与	5,930百万円	5,940百万円
賞与引当金繰入額	2,740百万円	2,572百万円
退職給付費用	491百万円	469百万円
株式給付引当金繰入額	15百万円	16百万円
減価償却費	352百万円	348百万円
賃借料	1,215百万円	1,286百万円

(四半期連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※ 現金及び現金同等物の四半期末残高と四半期連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係は下記のとおりであります。

	前第2四半期連結累計期間 (自 令和2年10月1日 至 令和3年3月31日)	当第2四半期連結累計期間 (自 令和3年10月1日 至 令和4年3月31日)
現金及び預金勘定	24,997百万円	25,065百万円
預入期間が3か月を超える定期預金	△3,300百万円	△3,300百万円
現金及び現金同等物	21,697百万円	21,765百万円

(株主資本等関係)

I 前第2四半期連結累計期間(自 令和2年10月1日 至 令和3年3月31日)

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日	配当の原資
令和2年12月18日 定時株主総会	普通株式	1,720	65	令和2年9月30日	令和2年12月21日	利益剰余金

- (注) 1. 令和2年12月18日定時株主総会による配当額の総額には、役員報酬BIP信託が所有する当社株式に対する配当金12百万円が含まれています。
2. 令和3年4月1日付で普通株式1株につき2株の割合で株式分割を行っております。1株当たり配当額は、当該株式分割前の金額を記載しています。

(2) 基準日が当第2四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第2四半期連結会計期間末後となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日	配当の原資
令和3年5月7日 取締役会	普通株式	1,720	65	令和3年3月31日	令和3年6月14日	利益剰余金

- (注) 1. 令和3年5月7日取締役会決議による配当額の総額には、役員報酬BIP信託が所有する当社株式に対する配当金7百万円が含まれています。
2. 令和3年4月1日付で普通株式1株につき2株の割合で株式分割を行っております。1株当たり配当額は、当該株式分割前の金額を記載しています。

II 当第2四半期連結累計期間(自 令和3年10月1日 至 令和4年3月31日)

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日	配当の原資
令和3年12月17日 定時株主総会	普通株式	2,090	39.50	令和3年9月30日	令和3年12月20日	利益剰余金

- (注) 令和3年12月17日定時株主総会による配当額の総額には、役員報酬BIP信託が所有する当社株式に対する配当金8百万円が含まれています。

(2) 基準日が当第2四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第2四半期連結会計期間末後となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日	配当の原資
令和4年5月10日 取締役会	普通株式	1,894	36	令和4年3月31日	令和4年6月13日	利益剰余金

- (注) 令和4年5月10日取締役会決議による配当額の総額には、役員報酬BIP信託が所有する当社株式に対する配当金7百万円が含まれています。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

I 前第2四半期連結累計期間（自 令和2年10月1日 至 令和3年3月31日）
報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位：百万円)

	報告セグメント				調整額 (注) 1	四半期連結 損益計算書 計上額 (注) 2
	会計事務所 事業	地方公共 団体事業	印刷事業	合計		
売上高						
(1) 外部顧客への売上高	22,466	9,358	1,547	33,372	—	33,372
(2) セグメント間の内部 売上高又は振替高	4	0	802	806	△806	—
計	22,470	9,358	2,350	34,179	△806	33,372
セグメント利益又は損失(△)	5,990	2,028	△117	7,900	5	7,906

(注) 1. セグメント利益又は損失の調整額5百万円は、セグメント間取引消去額及び棚卸資産の調整額等であり
ます。

2. セグメント利益又は損失は、四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

II 当第2四半期連結累計期間（自 令和3年10月1日 至 令和4年3月31日）
報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位：百万円)

	報告セグメント				調整額 (注) 1	四半期連結 損益計算書 計上額 (注) 2
	会計事務所 事業	地方公共 団体事業	印刷事業	合計		
売上高						
(1) 外部顧客への売上高	22,776	9,311	1,680	33,768	—	33,768
(2) セグメント間の内部 売上高又は振替高	1	0	926	927	△927	—
計	22,778	9,311	2,606	34,696	△927	33,768
セグメント利益	6,456	1,740	28	8,226	△1	8,225

(注) 1. セグメント利益の調整額△1百万円は、セグメント間取引消去額及び棚卸資産の調整額等であり
ます。

2. セグメント利益は、四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

(収益認識関係)

当社の売上高は、主に顧客との契約から認識された収益であり、当社の報告セグメントを財又はサービスの種類別に分解した場合の内訳は、以下の通りです。

当第2四半期連結累計期間（自 令和3年10月1日 至 令和4年3月31日）

(単位：百万円)

	報告セグメント			合計
	会計事務所事業	地方公共団体事業	印刷事業	
コンピューターサービス収入	7,764	4,197	—	11,962
ソフトウェア売上高	9,092	3,347	—	12,439
コンサルティング収入	3,446	358	—	3,804
オフィス機器売上高	1,918	1,409	—	3,328
会計用品売上高	554	—	—	554
印刷関連サービス収入	—	—	1,680	1,680
外部顧客への売上高	22,776	9,311	1,680	33,768

(1株当たり情報)

1株当たり四半期純利益及び算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前第2四半期連結累計期間 (自 令和2年10月1日 至 令和3年3月31日)	当第2四半期連結累計期間 (自 令和3年10月1日 至 令和4年3月31日)
1株当たり四半期純利益	104円42銭	110円82銭
(算定上の基礎)		
親会社株主に帰属する四半期純利益 (百万円)	5,495	5,816
普通株主に帰属しない金額 (百万円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する四半 期純利益 (百万円)	5,495	5,816
普通株式の期中平均株式数 (百株)	526,251	524,798

- (注) 1. 1株当たり情報の算定に用いられた期中平均株式数は、役員報酬BIP信託導入に伴い設定された役員報酬BIP信託口が所有する当社株式を控除対象の自己株式に含めて算定しております。
1株当たり四半期純利益の算定上、控除した当該自己株式の期中平均株式数は、前第2四半期連結累計期間において308,813株、当第2四半期連結累計期間において219,016株であります。
2. 潜在株式調整後1株当たり四半期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
3. 当社は、令和3年4月1日付で普通株式1株につき2株の割合で株式分割を行っております。前連結会計年度の期首に当該株式分割が行われたと仮定し、1株当たり四半期純利益を算定しております。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

2 【その他】

令和4年5月10日開催の取締役会において、当期中間配当に関し、次のとおり決議いたしました。

- | | |
|-----------------------|-----------|
| (イ) 中間配当による配当金の総額 | 1,894百万円 |
| (ロ) 1株当たりの金額 | 36円00銭 |
| (ハ) 支払請求の効力発生日及び支払開始日 | 令和4年6月13日 |

(注) 令和4年3月31日現在の株主名簿に記載又は記録された株主に対し、支払いを行います。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の四半期レビュー報告書

令和4年5月11日

株式会社TKC

取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 本 多 茂 幸

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 飯 塚 徹

監査人の結論

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、「経理の状況」に掲げられている株式会社TKCの令和3年10月1日から令和4年9月30日までの連結会計年度の第2四半期連結会計期間（令和4年1月1日から令和4年3月31日まで）及び第2四半期連結累計期間（令和3年10月1日から令和4年3月31日まで）に係る四半期連結財務諸表、すなわち、四半期連結貸借対照表、四半期連結損益計算書、四半期連結包括利益計算書、四半期連結キャッシュ・フロー計算書及び注記について四半期レビューを行った。

当監査法人が実施した四半期レビューにおいて、上記の四半期連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して、株式会社TKC及び連結子会社の令和4年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する第2四半期連結累計期間の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を適正に表示していないと信じさせる事項が全ての重要な点において認められなかった。

監査人の結論の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に準拠して四半期レビューを行った。四半期レビューの基準における当監査法人の責任は、「四半期連結財務諸表の四半期レビューにおける監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、結論の表明の基礎となる証拠を入手したと判断している。

四半期連結財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して四半期連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない四半期連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

四半期連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき四半期連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

四半期連結財務諸表の四半期レビューにおける監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した四半期レビューに基づいて、四半期レビュー報告書において独立の立場から四半期連結財務諸表に対する結論を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に従って、四半期レビューの過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- 主として経営者、財務及び会計に関する事項に責任を有する者等に対する質問、分析的手続その他の四半期レビュー手続を実施する。四半期レビュー手続は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して実施される年度の財務諸表の監査に比べて限定された手続である。
- 継続企業の前提に関する事項について、重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められると判断した場合には、入手した証拠に基づき、四半期連結財務諸表において、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して、適正に表示されていないと信じさせる事項が認められないかどうか結論付ける。また、継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、四半期レビュー報告書において四半期連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する四半期連結財務諸表の注記事項が適

切でない場合は、四半期連結財務諸表に対して限定付結論又は否定的結論を表明することが求められている。監査人の結論は、四半期レビュー報告書日までに入手した証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。

- 四半期連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠していないと信じさせる事項が認められないかどうかとともに、関連する注記事項を含めた四半期連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに四半期連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示していないと信じさせる事項が認められないかどうかを評価する。
- 四半期連結財務諸表に対する結論を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する証拠を入手する。監査人は、四半期連結財務諸表の四半期レビューに関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査人の結論に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した四半期レビューの範囲とその実施時期、四半期レビュー上の重要な発見事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1 上記の四半期レビュー報告書の原本は当社（四半期報告書提出会社）が別途保管しております。
2 XBRLデータは四半期レビューの対象には含まれておりません。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の8第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	令和4年5月11日
【会社名】	株式会社TKC
【英訳名】	TKC Corporation
【代表者の役職氏名】	代表取締役 社長執行役員 飯塚 真規
【最高財務責任者の役職氏名】	取締役 常務執行役員 経営管理本部長 中西 清嗣
【本店の所在の場所】	栃木県宇都宮市鶴田町1758番地
【縦覧に供する場所】	株式会社TKC東京本社 (東京都新宿区揚場町2番1号) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【四半期報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長執行役員飯塚真規及び当社最高財務責任者中西清嗣は、当社の第56期第2四半期（自令和4年1月1日 至令和4年3月31日）の四半期報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認しました。

2 【特記事項】

特記すべき事項はありません。